



# 戴巻之八

近湖村 楓院所 戴



ほきくからまに日くく。祝よむらひて。おほらりゆきよーは  
 くらげころけくおまほくらいあやー。あてたぐるねけき  
 いでやいせふうまはくく。はくくくくままらるまのいんげん  
 の侍位いしもかーあー竹のうねよ乃末葉まで。人間の様さ  
 れそろんでれき。一乃人れ侍者さほいらく也。をそくもを録り  
 たいで録つらまりゆーせも。真子しまごまでいらくれあはれど  
 ねるはちう。う積より志もつうこいをふほきつ。時にあひあり  
 ぐななれも。んぐうういみだや思うらりどいけけは。法師がらり  
 うやまううまのいあう。人よは本のうれやうに思つらり  
 清少納言がのあもれ。けふうららそくういまうにの  
 ちりうらふつをそらみどらん。ど傍かへらうこのいんげんか  
 ー。名もがれく。佛の侍をう。うあうんもど。あやうららこ  
 ありうせれ人の中く。はをうまらるあ

あはれこいれく  
 うららこいれく  
 うららこいれく



イ 雲のちや

世のちやまはゆるむな 群とのけいり  
ついでに物のあはれとあると世は定るなりといひけし命のわらわ  
今更りにまじりぬがもろふけをまら夏の様はまねとあらわのて  
しほくぐやと物なぐしはなるとしあまのまきやのまねと思ひ  
ふくまぬさぬも。一教の愛にあらしとせぬ。信そぬ世。んあま  
まらそく何のやん。命ならけしに物やか。いんも四年にそぬやめく  
死るんそちやとらふか。其なとらふまじ。形をうつるか。いんまじ  
ららん。まじし。メの陽。いんまを。て。うゆ。まを。んま。て。ろ。命。を  
わはし。いん。す。世。まじ。さ。が。ら。の。ま。う。く。物。の。ま。ま。に。成。り。ん。ま  
世の人をまにん事。文。欲。は。ま。う。ど。人。の。い。を。う。ら。た。ら。物。の。白。い。ま。ら  
う。れ。物。か。ら。ん。志。づ。く。衣。裳。ま。た。ま。物。と。ま。ん。か。ら。う。え。る。ま。白。い。ま。ら  
必。く。ま。ら。れ。と。ら。わ。か。ん。久。ま。ゆ。人。の。物。の。ま。れ。た。け。は。白。と。成。ん。て。通。と。ま。ひ  
々。人。の。い。ん。ま。と。た。の。清。ふ。肥。わ。う。つ。ま。う。ん。か。け。ま。か。ら。ぬ。物。の。あ。ん。

五

世のちやまはゆるむな 群とのけいり  
ついでに物のあはれとあると世は定るなりといひけし命のわらわ  
今更りにまじりぬがもろふけをまら夏の様はまねとあらわのて  
しほくぐやと物なぐしはなるとしあまのまきやのまねと思ひ  
ふくまぬさぬも。一教の愛にあらしとせぬ。信そぬ世。んあま  
まらそく何のやん。命ならけしに物やか。いんも四年にそぬやめく  
死るんそちやとらふか。其なとらふまじ。形をうつるか。いんまじ  
ららん。まじし。メの陽。いんまを。て。うゆ。まを。んま。て。ろ。命。を  
わはし。いん。す。世。まじ。さ。が。ら。の。ま。う。く。物。の。ま。ま。に。成。り。ん。ま  
世の人をまにん事。文。欲。は。ま。う。ど。人。の。い。を。う。ら。た。ら。物。の。白。い。ま。ら  
う。れ。物。か。ら。ん。志。づ。く。衣。裳。ま。た。ま。物。と。ま。ん。か。ら。う。え。る。ま。白。い。ま。ら  
必。く。ま。ら。れ。と。ら。わ。か。ん。久。ま。ゆ。人。の。物。の。ま。れ。た。け。は。白。と。成。ん。て。通。と。ま。ひ  
々。人。の。い。ん。ま。と。た。の。清。ふ。肥。わ。う。つ。ま。う。ん。か。け。ま。か。ら。ぬ。物。の。あ。ん。

十

世のちやまはゆるむな 群とのけいり  
ついでに物のあはれとあると世は定るなりといひけし命のわらわ  
今更りにまじりぬがもろふけをまら夏の様はまねとあらわのて  
しほくぐやと物なぐしはなるとしあまのまきやのまねと思ひ  
ふくまぬさぬも。一教の愛にあらしとせぬ。信そぬ世。んあま  
まらそく何のやん。命ならけしに物やか。いんも四年にそぬやめく  
死るんそちやとらふか。其なとらふまじ。形をうつるか。いんまじ  
ららん。まじし。メの陽。いんまを。て。うゆ。まを。んま。て。ろ。命。を  
わはし。いん。す。世。まじ。さ。が。ら。の。ま。う。く。物。の。ま。ま。に。成。り。ん。ま  
世の人をまにん事。文。欲。は。ま。う。ど。人。の。い。を。う。ら。た。ら。物。の。白。い。ま。ら  
う。れ。物。か。ら。ん。志。づ。く。衣。裳。ま。た。ま。物。と。ま。ん。か。ら。う。え。る。ま。白。い。ま。ら  
必。く。ま。ら。れ。と。ら。わ。か。ん。久。ま。ゆ。人。の。物。の。ま。れ。た。け。は。白。と。成。ん。て。通。と。ま。ひ  
々。人。の。い。ん。ま。と。た。の。清。ふ。肥。わ。う。つ。ま。う。ん。か。け。ま。か。ら。ぬ。物。の。あ。ん。

口 〇  
りいさばりあやうしてあつたけいせいのしやうを  
いかにいふことも成らん。うらやましくさうさうとて家柄に  
ふかふかあまのけいあまのあまのねむらねむらねむら  
縄とあつたりけるねむらねむらねむらねむらねむら  
乃ゆかばりいしそそそ。其後いふことしはむらふ後おぼえのれ  
りすれおぼえのしゆいづらど口鑑をいつれらうらうらうのそのいふれ  
ゆにねむらねむらねむらねむらねむらねむらねむらねむらねむら  
せんのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまの  
津すのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまの  
若れ細みりいすそそそ。あまのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまの  
うきいのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
りいさばりあやうしてあつたけいせいのしやうをいかにいふことも成らん。

〇  
りいさばりあやうしてあつたけいせいのしやうをいかにいふことも成らん。  
いかにいふことも成らん。うらやましくさうさうとて家柄に  
ふかふかあまのけいあまのあまのねむらねむらねむら  
縄とあつたりけるねむらねむらねむらねむらねむら  
乃ゆかばりいしそそそ。其後いふことしはむらふ後おぼえのれ  
りすれおぼえのしゆいづらど口鑑をいつれらうらうらうのそのいふれ  
ゆにねむらねむらねむらねむらねむらねむらねむらねむらねむら  
せんのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまの  
津すのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまの  
若れ細みりいすそそそ。あまのけいあまのけいあまのけいあまのけいあまの  
うきいのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの  
りいさばりあやうしてあつたけいせいのしやうをいかにいふことも成らん。



此の書は... 後して... 白氏文集... 南唐の...

此の書は... 白氏文集... 南唐の...

此の書は... 白氏文集... 南唐の...

此の書は... 白氏文集... 南唐の...

正しく... 善い公けし... 神楽... ちりけし...

身は... 何本の... 孫農... 一東... 折...

い... 鳥... 雨... 六... 七... 又... 今...

... 今...













何の何の... 今... 何の何の... 今... 何の何の... 今...

五月... 五月... 五月... 五月... 五月... 五月... 五月... 五月... 五月... 五月...

市橋... 市橋... 市橋... 市橋... 市橋... 市橋... 市橋... 市橋... 市橋... 市橋...

春の... 春の... 春の... 春の... 春の... 春の... 春の... 春の... 春の... 春の...

此の... 此の... 此の... 此の... 此の... 此の... 此の... 此の... 此の... 此の...



一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、  
 十一、  
 十二、  
 十三、  
 十四、  
 十五、

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、  
 十一、  
 十二、  
 十三、  
 十四、  
 十五、

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、  
 十一、  
 十二、  
 十三、  
 十四、  
 十五、

一、  
 二、  
 三、  
 四、  
 五、  
 六、  
 七、  
 八、  
 九、  
 十、  
 十一、  
 十二、  
 十三、  
 十四、  
 十五、





た。そのうちあつたはよとてまじりて思をそむくあたりの事なり

家の造りやうの夏をむしひて冬にひかるおかしき事なるのついでに  
ほぢいを人のあつた。驟のほつをむしりておかしき事なるのついでに  
木のついでに石をむしりておかしき事なるのついでに  
木をむしりておかしき事なるのついでに  
おかしき事なるのついでに  
おかしき事なるのついでに

家の造りやうの夏をむしひて冬にひかるおかしき事なるのついでに  
ほぢいを人のあつた。驟のほつをむしりておかしき事なるのついでに  
木のついでに石をむしりておかしき事なるのついでに  
木をむしりておかしき事なるのついでに  
おかしき事なるのついでに  
おかしき事なるのついでに

人々のついでに石をむしりておかしき事なるのついでに  
木をむしりておかしき事なるのついでに  
おかしき事なるのついでに  
おかしき事なるのついでに

道のついでに石をむしりておかしき事なるのついでに  
木をむしりておかしき事なるのついでに  
おかしき事なるのついでに  
おかしき事なるのついでに



















よりて静かき心と懐きわたりけしきよみ希に... 鶴丸... 幻通... 女...

赤音... 陰陽道... 結... 幻化... 何来... 何ぞ... 廿九...

廿九... 廿九... 廿九... 廿九... 廿九... 廿九... 廿九... 廿九... 廿九... 廿九...

賤とじてや中は志引りしれは間すをいふもなして

ひささりの者か人味生紙子のほごうのたを思はるゆかたをいふとあれざる  
あはれ紙子のつらねとて思はれたりけりすけの相あづらねといひ其の  
さうりとはほごうのつらねとて思はれたりけりすけの相あづらねといひ其の

考登井相圓出はら信々々の執書とあつり北面のいさそ馬よりおつる  
けりそおぬほふ面かあぐり執書紙おつる下馬ゆり老るるがやのあ  
いせく老るはくまうらね(ま)とて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と

馬のよきものしるぎとて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と  
名のころめは信行の事いづかた信行の事いづかた有儀の人なるゆり  
くは執書付表紙に付るるあゆむるいづかた執書とて思はれけりゆふ面をさかへはる

ゆふ面をさかへはる執書とて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と  
ゆふ面をさかへはる執書とて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と  
ゆふ面をさかへはる執書とて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と

其物つらねをいふゆふ面をさかへはる執書とて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と  
其物つらねをいふゆふ面をさかへはる執書とて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と  
其物つらねをいふゆふ面をさかへはる執書とて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と

一 後世紙より古い糖粒純一におまじゆも也おまじゆもいづかたあつるゆふ面をさかへはる執書と  
おまじゆもいづかたあつるゆふ面をさかへはる執書と  
おまじゆもいづかたあつるゆふ面をさかへはる執書と

一 通葉若いさきい事つらねゆふ面をさかへはる執書とて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と  
通葉若いさきい事つらねゆふ面をさかへはる執書と  
通葉若いさきい事つらねゆふ面をさかへはる執書と

一 上高いた下高いたゆふ面をさかへはる執書とて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と  
上高いた下高いたゆふ面をさかへはる執書と  
上高いた下高いたゆふ面をさかへはる執書と

一 伴のそをいひゆふ面をさかへはる執書とて思はれけりゆふ面をさかへはる執書と  
伴のそをいひゆふ面をさかへはる執書と  
伴のそをいひゆふ面をさかへはる執書と

ちりきさく... 久我相圃... 成人任... 上せま... 母... せしせ...

平... 清... 又... 後... 免... 大...

み... 我... 人... 白... 乃... 鳥... 何...

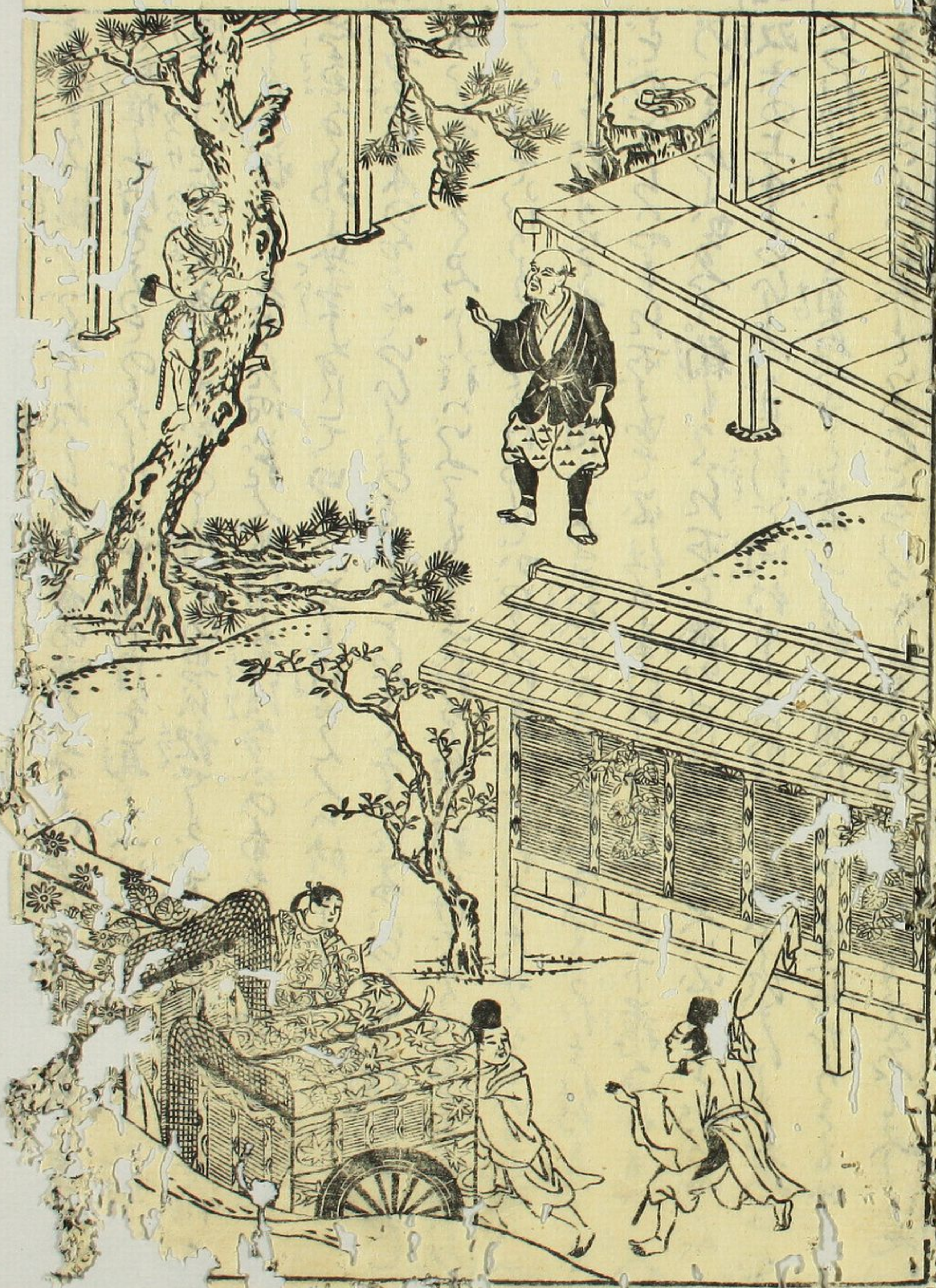
信子捕獲を...  
 北の座をふ...  
 廊下がもく...  
 白いのごとく...  
 高錦沈空...  
 口口から男...  
 又は希有...  
 尼よりうん...  
 たごの身...  
 口口の男...  
 何とつを...

女乃物...  
 と同く...  
 各々...  
 たる紙...  
 をはき...  
 くて安...  
 也。人の...  
 うつ...  
 秋...  
 れ者...

女乃物...  
 と同く...  
 各々...  
 たる紙...  
 をはき...  
 くて安...  
 也。人の...  
 うつ...  
 秋...  
 れ者...

又漢あきまきまをとりてかたはりのもいふうきうめい  
 男の知らぬははるりるかたへい其ま終りあつるまは  
 かりてつこまき物の女はうのまははるくよくあらんといひ  
 さればはら女の初めかたの言女あはる終り物とくすまは  
 るんをほしをあらじやうかたはるまはる時中うまはる  
 せりやうまはる

すはらむじんかたうまはるまはるあつるまはるあつるまはる  
 一張りうまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる  
 商人の二張りまはるまはるまはるまはるまはるまはる  
 まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる  
 傍びくまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる  
 あはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる  
 一みはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる  
 一日の内に飲食便利睡眠言結り歩つてまはるまはるまはる



ものまゝに眼<sup>まなこ</sup>づてをみくらに益<sup>えき</sup>の事<sup>こと</sup>をさしやれり  
 を思<sup>し</sup>惟<sup>ひ</sup>てけさうものをか後<sup>のち</sup>日<sup>ひ</sup>を清<sup>きよ</sup>く月<sup>つき</sup>を直<sup>ただ</sup>くべしと  
 運<sup>うん</sup>は花<sup>はな</sup>争<sup>あざむ</sup>受<sup>う</sup>成<sup>なる</sup>うたかたの一月<sup>ひとつき</sup>をも思<sup>し</sup>瓜<sup>うり</sup>祝<sup>いわ</sup>せり  
 さらき性<sup>せい</sup>も是<sup>こゝろ</sup>かた向<sup>むか</sup>ひた人<sup>ひと</sup>也<sup>なり</sup>。是<sup>こゝろ</sup>はちのちたうけし  
 事<sup>こと</sup>を非<sup>ひ</sup>し世<sup>よ</sup>事<sup>こと</sup>を以<sup>もつ</sup>て。四<sup>し</sup>いん中<sup>ちゆう</sup>修<sup>しゆ</sup>合<sup>ごう</sup>ん人<sup>にん</sup>の性<sup>せい</sup>也<sup>なり</sup>  
 ありんの本<sup>ほん</sup>のちりやいひたむも人<sup>ひと</sup>とされて。きうた本<sup>ほん</sup>の  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。いひてわん<sup>わん</sup>ト<sup>ト</sup>性<sup>せい</sup>いひてもなしてわん<sup>わん</sup>の  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 ぐと<sup>ぐと</sup>わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 ど<sup>ど</sup>わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 の<sup>の</sup>性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 双<sup>すわう</sup>六<sup>りく</sup>の上<sup>のうへ</sup>の<sup>の</sup>性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 一<sup>いち</sup>つ<sup>つ</sup>の<sup>の</sup>性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 まく<sup>まく</sup>の<sup>の</sup>性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。

畏<sup>おそ</sup>畏<sup>おそ</sup>双<sup>すわう</sup>六<sup>りく</sup>好<sup>こう</sup>くわう<sup>くわう</sup>くわん<sup>くわん</sup>の<sup>の</sup>性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。

の<sup>の</sup>性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。

性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。  
 性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。わん<sup>わん</sup>の性<sup>せい</sup>を格<sup>かく</sup>とす。





言ふ人七よ物三入人よはまありよい物くは念ふい  
 難のあつものしる日は髪をけずもえんあつたもはく  
 たる物よこそ難びりちもはかほにそり切も物たれい  
 まるやい難なるた物あり難ね草ちんは市湯あつるよ  
 りく物よはたそかいをうたるうり申さのほ方れ  
 柳よ存のつてはつとよふ入る度方ひ物とてゆも  
 づりれ物されがう真姿よてはたきたおてい  
 さま也けつぐもた人さうのあゆふよつた  
 録倉乃海よりつりつる魚の被さうい  
 物たりつれも録倉の年考のつゆいし思をの  
 けつぐも人乃おい出るつゆいもつりも  
 一花ならやよさまるもの物もせの  
 ざいんたに色

庫の物の業のかいありともさう  
 ぬれ書も字もさうつる毎のさ  
 て不せし流もてふはいもさう也  
 さたうとねどももてえいしけり  
 美しい物のは馬牛つるたれけり  
 物たれいといやん大いほり物  
 家さうたのわさるいけりも  
 て用るた物也さるもこのい  
 つしてさるさうい物もさる然  
 くんはわん人れをさるさる  
 ぐん也王子猷が鳥狐おち  
 一つさるい物れんさるしよ  
 人の文練い文明さうあて  
 つたなくとも是を習ふべし  
 牙を中めいんはとひた考り

物たれいといやん大いほり物  
 家さうたのわさるいけりも  
 て用るた物也さるもこのい  
 つしてさるさうい物もさる然  
 くんはわん人れをさるさる  
 ぐん也王子猷が鳥狐おち  
 一つさるい物れんさるしよ  
 人の文練い文明さうあて  
 つたなくとも是を習ふべし  
 牙を中めいんはとひた考り





一人をばみかきつてをのこす... 利をもとつるの只孝子のしるし也... 孝子部 王乃流し... 孝子のしるし也

我も東首と信つる... 孝子のしるし也... 孝子のしるし也

孝子のしるし也... 孝子のしるし也... 孝子のしるし也

を要せざるは其の意に非ざる

と云ふに其の意に非ざるは其の意に非ざる  
不だの意を以て其の意に非ざるは其の意に非ざる  
や及ぶとて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
は人の心を以て其の意に非ざるは其の意に非ざる  
たまふに余と申す大車。今爰に其の意に非ざるは其の意に非ざる  
資なきを以て其の意に非ざるは其の意に非ざる  
は人の心を以て其の意に非ざるは其の意に非ざる  
あつて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
た。何れも其の意に非ざるは其の意に非ざる  
備して其の意に非ざるは其の意に非ざる  
あつて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
ら其の意に非ざるは其の意に非ざる  
其の意に非ざるは其の意に非ざる

百

あつて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
た。何れも其の意に非ざるは其の意に非ざる  
備して其の意に非ざるは其の意に非ざる  
あつて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
ら其の意に非ざるは其の意に非ざる  
其の意に非ざるは其の意に非ざる  
あつて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
た。何れも其の意に非ざるは其の意に非ざる  
備して其の意に非ざるは其の意に非ざる  
あつて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
ら其の意に非ざるは其の意に非ざる  
其の意に非ざるは其の意に非ざる

百

あつて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
た。何れも其の意に非ざるは其の意に非ざる  
備して其の意に非ざるは其の意に非ざる  
あつて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
ら其の意に非ざるは其の意に非ざる  
其の意に非ざるは其の意に非ざる  
あつて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
た。何れも其の意に非ざるは其の意に非ざる  
備して其の意に非ざるは其の意に非ざる  
あつて其の意に非ざるは其の意に非ざる  
ら其の意に非ざるは其の意に非ざる  
其の意に非ざるは其の意に非ざる



と云ふに其の意に非ざるは其の意に非ざる

